

幸せの日本論

日本人という謎を解く

前野 隆司

(慶應義塾大学大学院

システムデザイン・

マネジメント研究科教授)



2018年03月10日

丸山 明久

著者： 前野 隆司 （まえの たかし）



- ✓ 1962年山口生まれ。東工大修士課程修了。キャノン入社後、ハーバード大学客員教授、慶應大学理工学部教授等を経て、現在、慶應大学大学院システムデザイン・マネジメント(SDM)研究科委員長・教授。
- ✓ 研究領域は、ヒューマンロボットインタラクション、ハプティックインタフェース、認知心理学・脳科学、心の哲学・倫理学から、地域活性化、イノベーション教育学、創造学、幸福学まで。
- ✓ 著書に、『脳はなぜ「心」を作ったのか』『錯覚する脳』『幸せのメカニズムー実践・幸福学入門』など。近著に『無意識の力を伸ばす8つの講義』『実践 ポジティブ心理学』などがある。

私の専門はシステムデザイン・マネジメント学という、学問分野横断的・全体統合的学問です。狭く深くではなく、学問分野を横断して、全体として要するに何が言えるのかを追求すること自体を専門とする学者です。だから、いかにそれぞれの分野の学者に、詳細が未検討だと言われようとも、全体を俯瞰し単純化して全体像を示すのが私のやっている学問の使命なのです。(本書P79)

第一章 これまでの日本論・日本人論・日本文化論

肯定系と否定系

戦前) 日本の特徴を明確化して伝える肯定系

『武士道』『菊と刀』『日本的靈性』

戦後) 西洋に対する自己批判的な否定系

『日本の思想』『「甘え」の構造』『「縮み」志向の日本人』

肯定と否定は非対称。

- ・否定は一つの問題点を指摘すればいい
- ・肯定は体系的な説明が必要

⇒死生観、幸・不幸、技術システム・社会システムのデザインについて考えてきた著者の視点から考えた、普遍可能な日本論を書きたい(一つのシステムデザインの事例と理解してもらいたい)。

第二章 日本人の十の特徴とは？

- ① 日本人には裏表がある
- ② 日本人は考えをはっきり言わない
- ③ 日本人は必要以上に謝る
- ④ 日本人は人の目を気にする
- ⑤ 日本人は決断が遅い
- ⑥ 日本人は意味もなくニコニコ笑う
- ⑦ 日本人は独立心、自尊心、自己統制感が低い
- ⑧ 日本人は外国人に対して差別をする
- ⑨ 日本人には海外コンプレックスがある
- ⑩ 日本人は日本人論が好きである

何だか自虐的？

同じ島国であるイギリスの特徴とも言える？

日本人の良さとも捉えられる⇒第六章で詳説

第三章 日本は中心に無がある

日本人は、中心に『無』がある文化を持っていて、
どんな新しいことも矛盾なく受け入れ、やがて日本化する。



- 【無常】すべてのことは移ろいゆく。常に正しいものはないし、常に栄えるものもない。
- 【無我】すべての物事の原因は、自分ではない。実体がない。
- 【無私】私心を捨てた献身の心。

アメリカでいう「愛と自由」のような中心的なスローガンがない。
物事は移ろいゆくし、自分もない、私心もない。

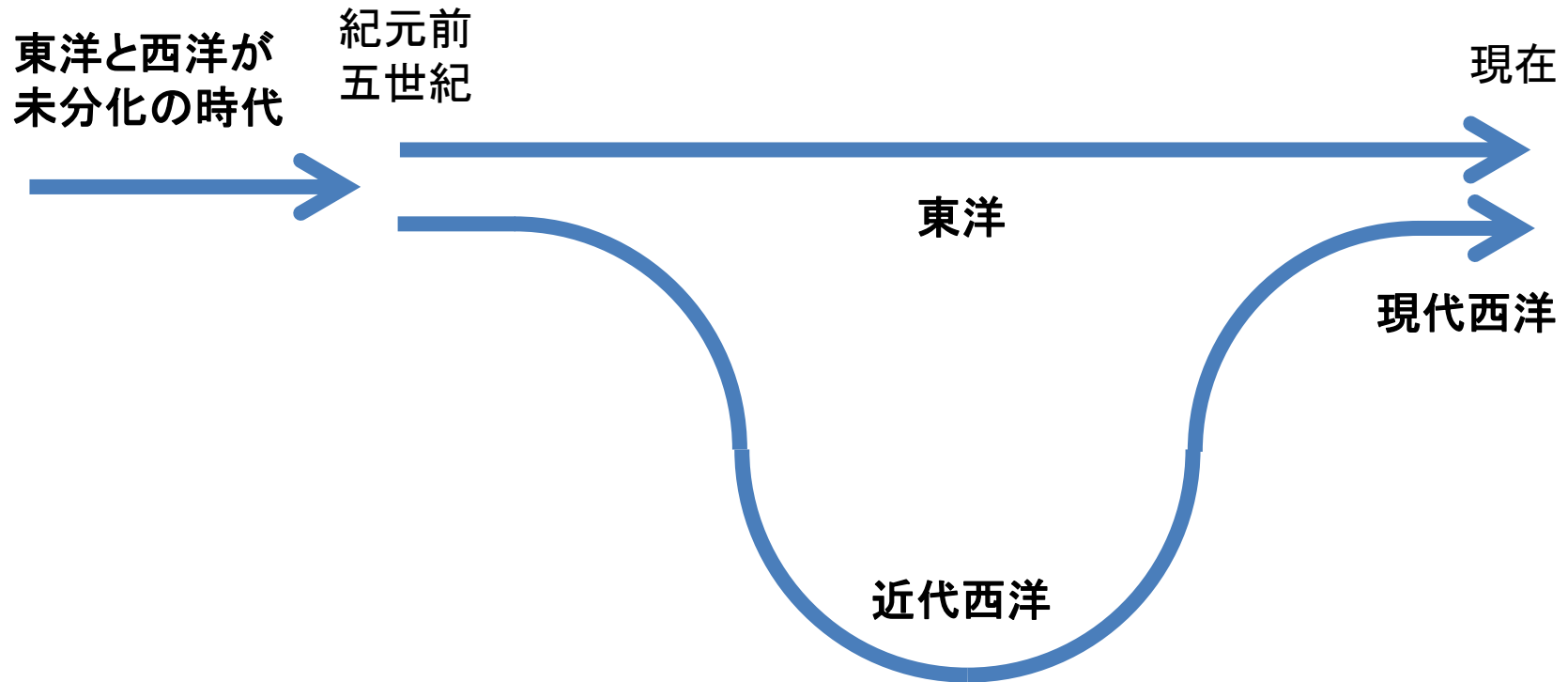
→中心がない。

→何でも受け入れられる。

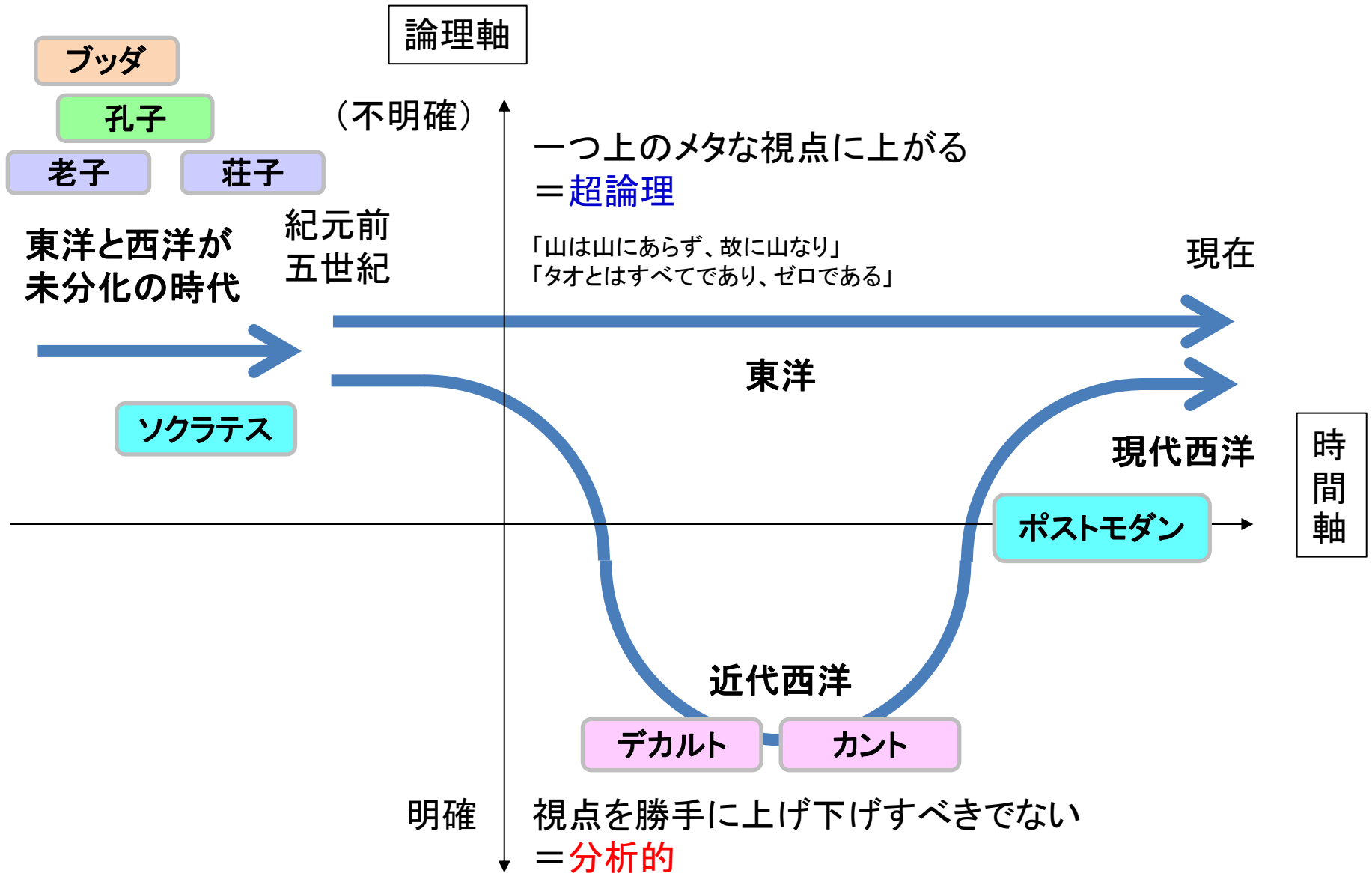
- ・中心に「無」があることによる**無限抱擁性**。
- ・どんなものも取り入れ、新たなものが生まれる**雑居性**、可能性。

第四章 東洋と西洋の二千五百年を俯瞰する

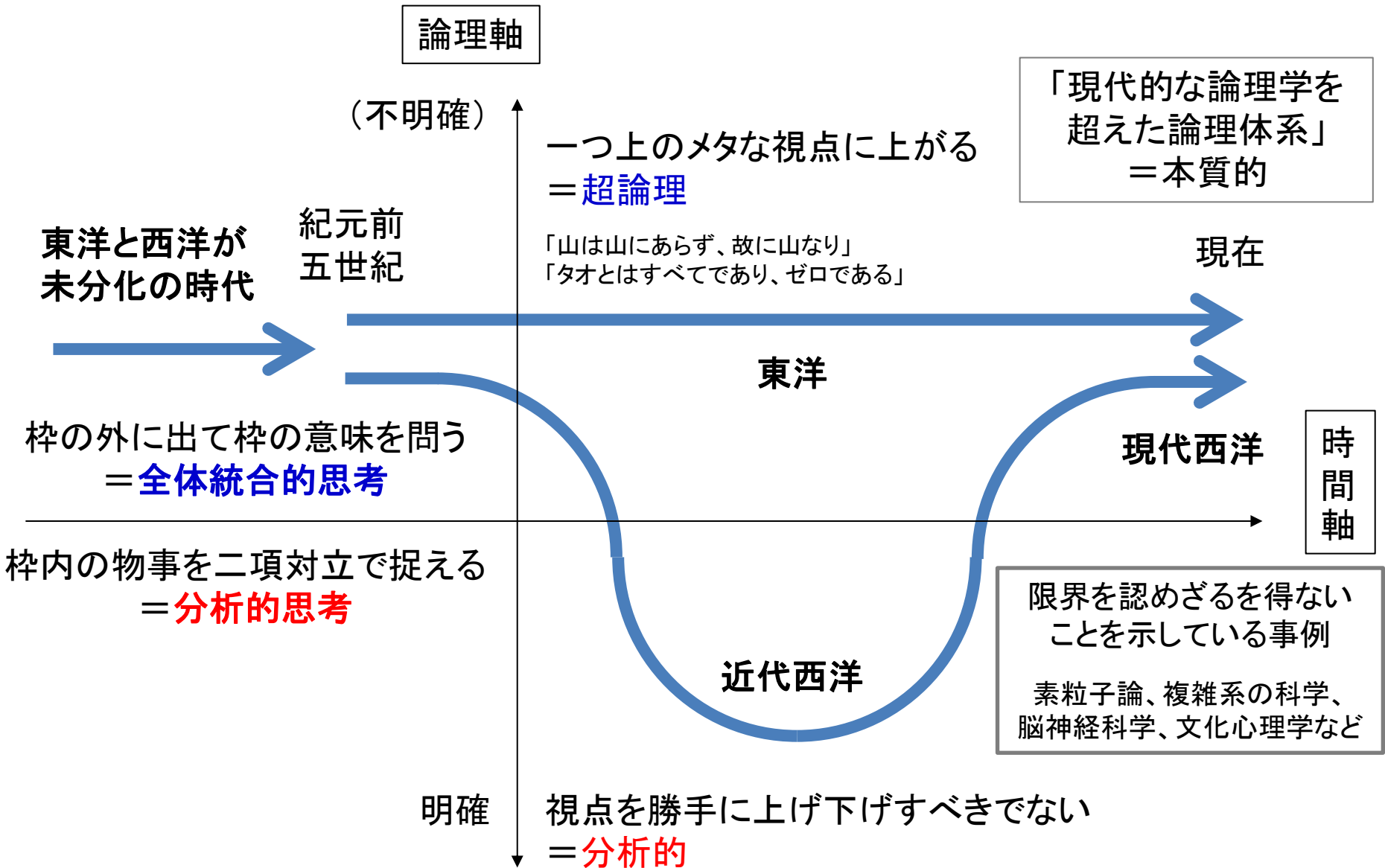
日本は、
東洋と西洋が未分化だった頃の考え方を残しつつ、近代西洋の
合理的で分析的なやり方も身に付けている稀有な国である。



第四章 東洋と西洋の二千五百年を俯瞰する



第四章 東洋と西洋の二千五百年を俯瞰する



第五章 世界の中の日本の二千年

- ◆ 神は自然の比喩、「神＝自然」と考えれば、神道が言ってきたほとんどのことは無理なく成り立つ。
- ◆ 西洋では、多神教的なギリシャ神話の世界観は、キリスト教が成立してからはその一神教的価値観に一掃（神は多→一人）。日本では、「仏教の無の思想でどんな人も救われるのなら、神様も救われる」と考え、神道と仏教が共存（神は多→多）。
- ◆ 神道（神話）から、素朴でまじめで女性的で平和で文化的な感性を身につけ日本化した。仏教から、生死とは何か、私とは何かという根源的な問いに対する哲学を身につけ日本化した。
- ◆ 経験してきた多様なことを、みんな、「中心が無」の構造の中に雑多な思想的ストックとして無自覚に持ち続けている（=**無限抱擁性、無自覚的雑居性**）。

第六章 日本人の十の特徴は良い特徴である

- ① 日本人には裏表がある
- ② 日本人は考えをはっきり言わない
- ③ 日本人は必要以上に謝る
- ④ 日本人は人の目を気にする
- ⑤ 日本人は決断が遅い
- ⑥ 日本人は意味もなくニコニコ笑う
- ⑦ 日本人は独立心、自尊心、自己統制感が低い
- ⑧ 日本人は外国人に対して差別をする
- ⑨ 日本人には海外コンプレックスがある
- ⑩ 日本人は日本人論が好きである

比較文化心理学は、欧米系からの目線であった。

➤ **欧米: 相互独立的自己観**

➤ **日本: 相互協調的自己観**

+ 「日本は中心が無である」ことから各々の良さを説明

第六章 日本人の十の特徴は良い特徴である

①日本人には裏表がある

⇒日本人とは、人間関係を円滑にするために、複雑な人格を使い分けることのできる繊細さを身に付けた国民である。

②日本人は考えをはっきり言わない

⇒日本は、迅速な判断をしなくても生きていけるサステナブルな国家であり、自分と違う者を認め合う寛容な社会である。

③日本人は必要以上に謝る

⇒日本は、人間社会の平和や調和に必要な「謝る」行動を忘れず、謙虚に譲り合う利他的な社会である。

④日本人は人の目を気にする

⇒調和的で平和な社会を構築するために、皆が何を考えているのか、何で困っているのかを、繊細に気配りしている。

⑤日本人は決断が遅い

⇒遅い決断はローリスク・ローリターンで、目先の利益よりも長く持続させることを考えたサステナビリティにつながる。

第六章 日本人の十の特徴は良い特徴である

⑥日本人は意味もなくニコニコ笑う

⇒笑顔を感情表現のみならず、コミュニティ円滑化のために、相互協調の装置として使っている。

⑦日本人は独立心、自尊心、自己統制感が低い

⇒個人の自立よりも集団としての全体の調和を重視している。

⑧日本人は外国人に対して差別をする

⇒中心が無である日本人の振る舞いは複雑となるため、外国人に対しては、外国人に理解されるように、日本人に対するのと違う振る舞いを使い分けている。

⑨日本人には海外コンプレックスがある

⇒文化的に辺境のコンプレックスがあるからこそ、様々なものを無自覚に取り入れ、後には自分化するということにつなげている。

⑩日本人は日本人論が好きである

⇒「日本人とは何か」が明確化しにくいために、次から次へと日本人論が出てきた(本書が日本論決定版である??? 日本人の良い特徴の説明はなし)。

第七章 日本人は女性的か、男性的か？

男性的な時代(争い・混乱)と、女性的な時代(受容・創造)を繰り返しながら、様々な物事を無限抱擁&消化し、日本化していった。現代は、男性的社会から女性的な調和の時代に移行する瀬戸際。

男性的	女性的
強さ、リーダーシップ、俯瞰的視点、父性愛、荒々しさ、愚直さ、厳格さ、攻撃性、自分勝手、…	か弱さ、協調性、目の前のことに対処できる力、母性愛、繊細さ、エレガントさ、包容力、柔軟さ、共感力、…

縄文時代	男性的
弥生時代～卑弥呼の古墳時代	女性的
仏教伝来や漢字の伝来	男性的
ひらがな発明の平安文化	女性的
鎌倉時代～戦国時代	男性的
江戸時代後半	女性的
明治維新～第二次大戦	男性的
現代	男性的→女性的(?)

第八章 外国人に「日本人とは」を伝える方法

本書の目的の一つは、日本人が、日本人とは何かを明確に理解し、それを外国人に説明できるようにすること。

日本の特徴は、中心に「無常」「無我」「無私」に代表される無があること。



「近代西洋以降のやり方だけが正しいわけではなく、一つの世界モデルに過ぎない。紀元前五世紀以前の世界こそ本質的であった。」ことを理解してもらう(メタな視点を理解させる)。



まずは、話してみることから始めよう。

日本のすばらしさを、たくさんの日本人が、胸を張って世界に伝えられたら、なんてすばらしいことでしょう。

第八章 外国人に「日本人とは」を伝える方法

そもそも近代西洋とは何か？
近代西洋の影響を受けた現代世界の論理とは何か？
そしてその限界は何か？

限界を認めざるを得ない
ことを示している事例
素粒子論、複雑系の科学、脳
神経科学、文化心理学など



近代西洋以降のやり方だけが正しいわけではなく、
それは一つの世界モデルに過ぎない。紀元前五世
紀以前には、そうではない世界があった。それは、
未熟だったのではなく、本質的だった。

何もないのではなく、無が
ある。
何もないように見えて実は
無があるから強い。
無があるということを何千
年も維持し続けてきた。
中心に無があるから、どん
な異質な文化も技術も受
入れ、自分化し続けること
ができる。
スーパー・サステナブル



日本の特徴は、中心に
「無常」「無我」「無私」に代表される無があること



第九章 日本はどれくらい特殊なのか？

- ◆ 『文明の衝突』(サミュエル・ハンチントン)での世界の文明の分類
→日本だけが一国一文明と見なされている。
- ◆ 世界が注目する日本的なものを、そうとは知らずにありがたがる。
 - システム思考＝物事を要素還元論的にのみ理解するのではなく、要素間の関係性として理解しよう、という考え方
 - デザイン思考＝個人主義的な米人が、日本人のようにチームでいいものを生み出すための手法として考えられたもの
 - マインドフルネス＝もともと仏教の瞑想や禅により心を落ち着けるやり方を、社員のモチベーションアップや仕事の効率向上に有効と考えて取り入れたもの

但し、東洋的なものが西洋に行くとき、いつも大事な部分が抜け落ちて単純化されてしまう。それは、西洋は、論理的・合理的・二項対立的価値観の中で理解するため。

- ◆ 日本人は、東洋発西洋行きのような文化や学問をありがたがって逆輸入し、無限抱擁し、雑居させている、

第十章 全体が調和し、共生する未来社会

- ◆ 著者の思い描く理想的な未来日本とは、**豊かな森のような国**。
- ◆ 自然は循環する開放システム。あらゆるものが意味を持っている。共生しているからサステナブル(持続可能)。多様だからレジリエント(頑強)。そして、人間は自然の一部である。
- ◆ 森では、動植物は無自覚に雑居しているが、調和は保たれ、豊かに成り立っている。
- ◆ 「**勝ち残りゲーム式社会モデル**」から「**全体が調和し共生する社会モデル**」へ実現可能な部分から始めよう(じわじわと進行中)。

第十章 全体が調和し、共生する未来社会

システムの 評価項目	全体が調和し共生する社会モデル (日本式システムの理想型)	勝ち残りゲーム式社会モデル (典型的な近・現代型システム)
システム全体の 構造の特徴	フラット・ネットワーク型	トップダウン・ピラミッド型
システムの 構造の特徴	多様・複雑・冗長・無駄	単純・合理的・必要最小限
システムの 構造的な概念	生命的・有機的	機械的・モジュール的
人々の関係性	協力的・相互依存的	競争的・個人主義的
人々の振る舞い方	謙虚でやさしい(利他的)	自己主張(利己的)
人々のつながり方	想いによるつながり	統率によるつながり
リーダーシップ	調和型	牽引型
解のありよう	多様な満足解	単一の最適解
システム間の関係	すべてを活かし共存	弱肉強食
勝敗の有無と価値	すべてが意味を持つ	敗者は退場
社会の向かう方向	幸福で平和な社会	格差社会

第十一章 繁栄の時代がやって来る

- ◆ 長寿企業や社会的企業は、**全体調和共生社会**をすでに実践
 - ✓ 社会企業は、利益優先を考えない姿勢に共感と支持を集め、支援が得られる結果として、利益が出る。
 - ✓ 金・もの・地位を手に入れることが幸せへの近道(20世紀のパラダイム)→全体調和モデルへ(幸福学の研究結果より)
- ◆ 全体調和モデルへのパラダイム・シフトを日本ができる理由
 - ① 日本の参加者としての実感(実例を通して)
 - ② 歴史を俯瞰して(過去にそうしてきた)
 - ③ 複合ネットワーク技術、科学技術がキー(日本が得意)(実現は3~300年くらいの間で)
- ◆ 「幸せの総和(最大多数の最大幸福)を個人個人の富の総和」は間違い→「皆の幸せに資することが、よりよい社会経済システム」という価値観に転換すべき(=皆が調和し共生する社会)

感想

1. 常盤塾で考えてきたこととに通じる。
 - ・自然(森)が手本
 - ・東洋思想(⇔ 西洋の近代合理主義)
 - ・利他、想い、すべてが意味をもつ、…
2. 日本の肯定論が少し強過ぎ(?)。
理想形を追い求めるのは、二元論のワナに囚われている?
⇒楢円思考で考えることも必要。
3. システムデザイン・マネジメントによる整理と言うが、結論への導きが分かり難い。
 - ・根拠となるエビデンスが弱い
 - ・丸山真男の『日本の思想』(無限抱擁性、思想的雑居性)が論拠のコア(?)

本書のポイント

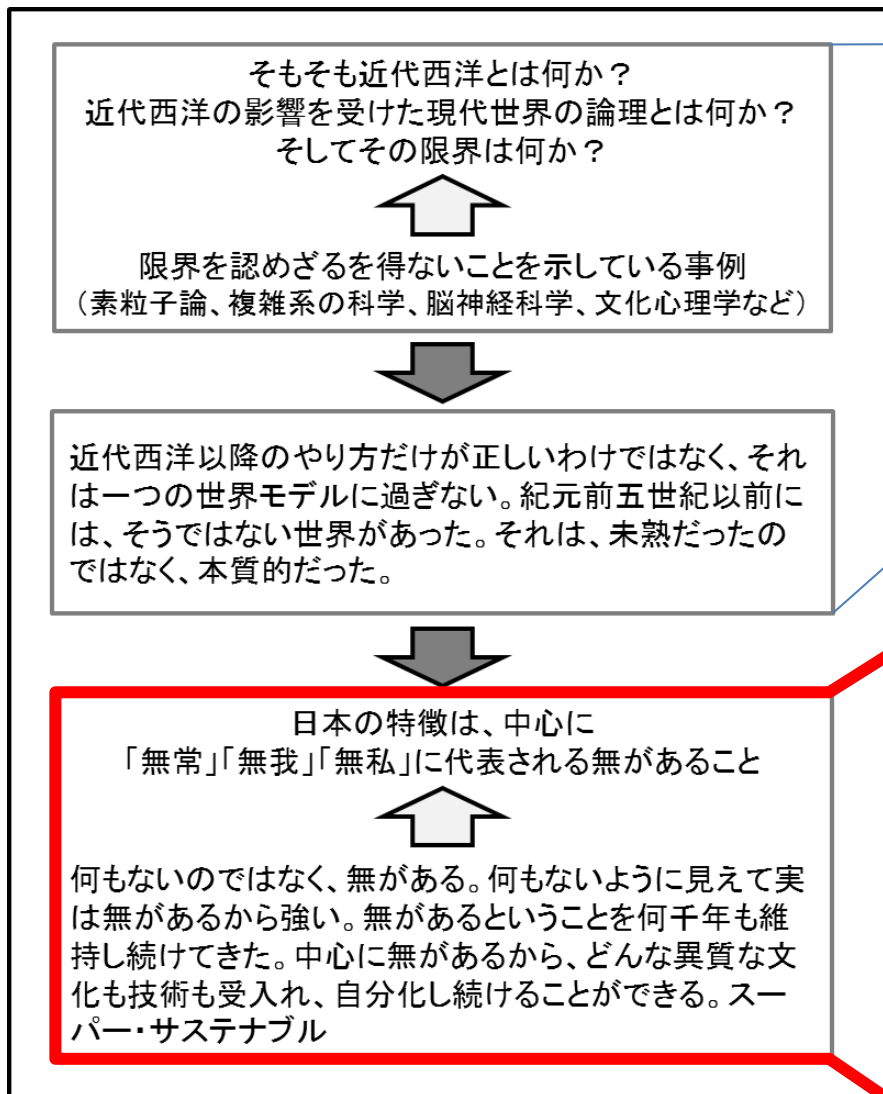


図6 欧米人に「日本人は何か」を説明する手順 (P163)

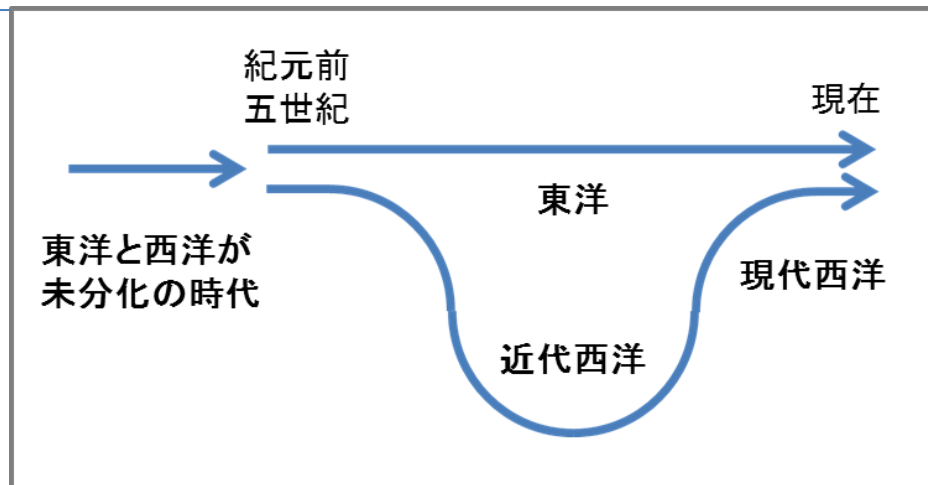


図4 東洋と西洋の変遷のイメージ図 (P77)

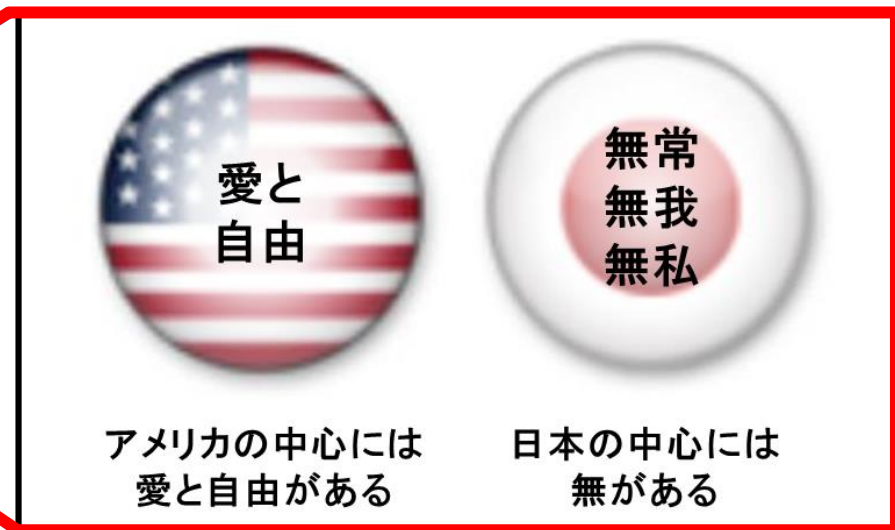


図1 アメリカと日本の中心には何があるか (P50)

アメリカの中心

アメリカの中心が「自由と愛」というのは本当か？
「キリスト教は愛の宗教、アメリカは自由の国」
⇒国歌、ハリウッドの映画をしてみる

アメリカ国歌

1. おお、見えるだろうか、
夜明けの薄明かりの中
我々は誇り高く声高に叫ぶ
危難の中、城壁の上に
雄々しく翻(ひるがえ)る
太き縞に輝く星々を我々は目にした
砲弾が赤く光を放ち宙で炸裂する中
我等の旗は夜通し翻っていた
ああ、星条旗はまだたなびいているか
自由の地 勇者の故郷の上に！
2. ~ 4. も最後に
「**自由**の地 勇者の故郷の上に！」
を繰り返している。

「鈴木敏夫のジブリ汗まみれ」より

鈴木敏夫:スターウォーズのプロデューサーの話をちょっと聞いたことがあって。スターウォーズ作るときに何を一番考えたか。今までのハリウッドの否定をしなきゃいけない。今までのハリウッドは西部劇だろうがギャングものだろうが、最後は**テーマは「愛」**。何しろハリウッドってシステムティックだから、これから愛じゃ商売にならないって(笑)その人が言ったのは**これからはフィロソフィー。哲学だって**。これがスターウォーズだったらしいんですよ。

日本の中心

日本の中心は何か？

中心の宗教である仏教⇒無（無常、無我）

『無』とは何か？について、分かり易い説明を探してみると、

hasunoha（お坊さんだから伝えられること）より

本来の無とは、もともとまっさらな純粹無垢な世界のこと。そこに対して自分の思いのペンキで塗りたくる（有化される）前、**脚色される前の様子を無**というのです。

だから、目の前にもものがあっても無くても、元々の様子が無。

なくなる、とか虚無とか、そういうことではない。

ものがありながらも、**考えや思考のペンキで塗りたくられ「有心され」ないことが無**です。

◎日本人の中心にある『無』をメタファーで表現すると、

・真っ白なキャンバス

・映画のスクリーン

（モノとしては有であるが、絵画や映画のためには無である存在）

⇒日本人は、中心に『無』がある文化を持っていて、どんな新しいことも矛盾なく受け入れ、やがて日本化する。

日本の中心

西田幾多郎による日本的な精神の神髄

「私は日本文化の特色と云うのは…何処までも自己自身を否定して物となる、物となって見、物となって行くと云うにあるのではないかと思う。**己を空うして物を見る、自己が物に没する、無心とか自然法爾とか云うことが**、我々日本人の強い憧憬境地であると思う。…**日本精神の神髄は、物に於て、事に於て一となると云うこと**でなければならない」
(=一幅の絵を見、茶碗をめ、桜に感動するという日本的な美的な文化そのもの)

	西洋	日本
文化の根底 (絶対者)	「神」	「無」
論理	「物の論理」	「心の論理」
	主体を超越的なものとして残し、理性により現実の事物の世界を分析し、手を加える	自己の心のうちを徹底して覗き込み、無にゆきつき、それが現実の実相だと知る方向に向かう

本書のポイント

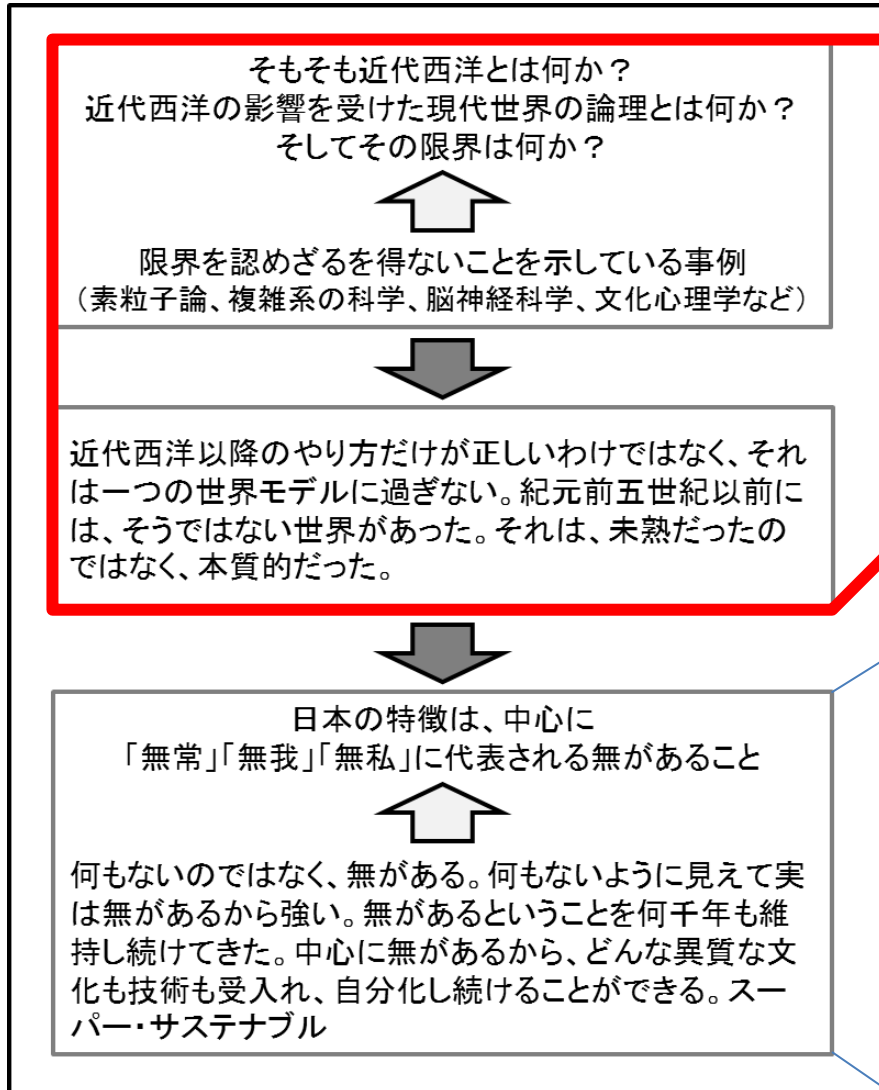


図6 欧米人に「日本人は何か」を説明する手順 (P163)

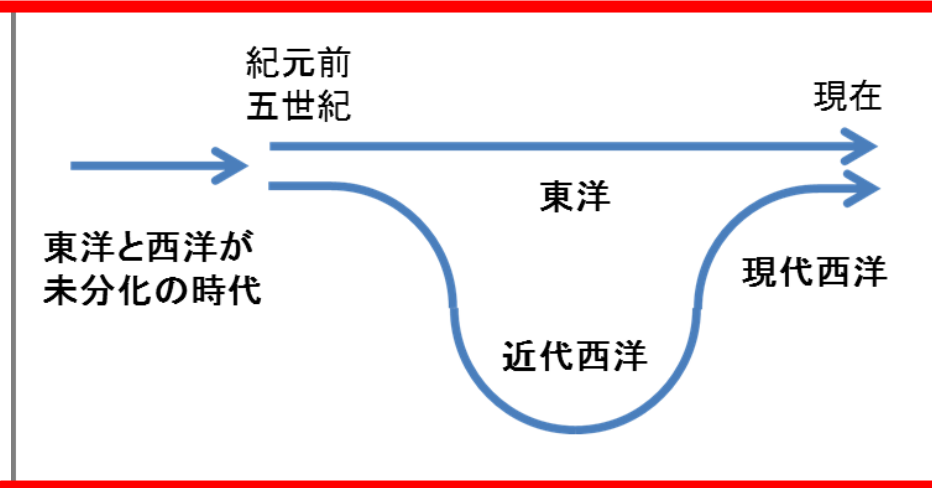


図4 東洋と西洋の変遷のイメージ図 (P77)

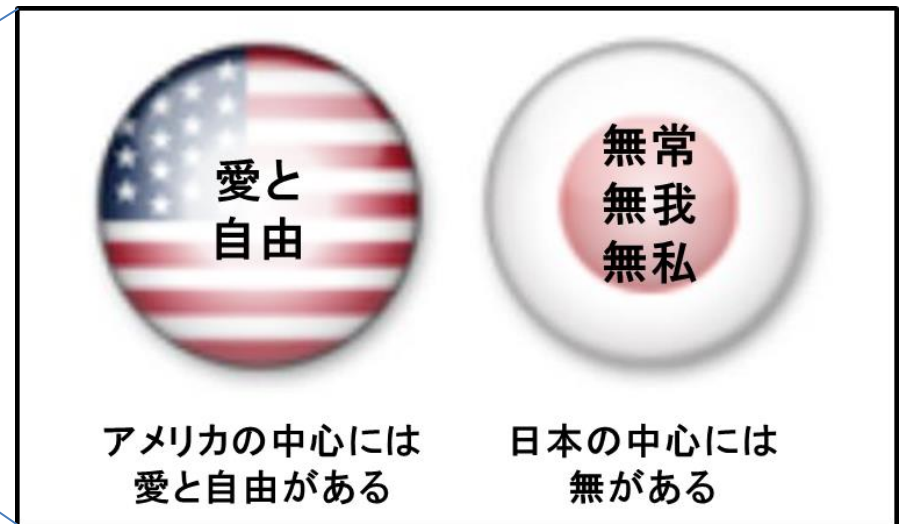


図1 アメリカと日本の中心には何があるか (P50)

近代西洋の発展

- ✓ 西洋では、近代合理主義 → 近代科学が発達
 - ✓ 近代合理主義＝ルネサンスにアリストテレス論理学の取込み
 - ✓ 論理は英語でロジック(logic) ← ロゴス ⇔ ミュトスと対比
(ロゴス: 世界を構成する言葉、論理、ミュトス: 神話、ものがたり)
 - ✓ 三段論法: 大前提、小前提および結論という3個の命題
「結論＝真」←「前提＝真」& 論理学の三大原理が守られる
(同一律「AはA」、無矛盾律「Aは非Aでない」、排中律「Aか非Aのいずれか」)
 - ✓ 二分法 ⇒ 合理的。合理的は英語でrational(語源は計算、割合)
- ◎西洋の「合理」は計算できること、日本は「理」に「合致」すること)

<古代ギリシア>

- プロタゴラス [前490頃-420頃] : 相対主義を提唱
- ソクラテス [前469頃 -399] : 絶対的真理の存在を主張
- プラトン [前427 -347] : 二元論(現実界とイデア界という対立軸)を考案
- アリストテレス [前384 -322] : 分類法(観測可能な物事を観察→分類)を考案
論理学を見出す。三段論法を整理。フィロソフィア(知を愛する)を人間の本质と考えた。

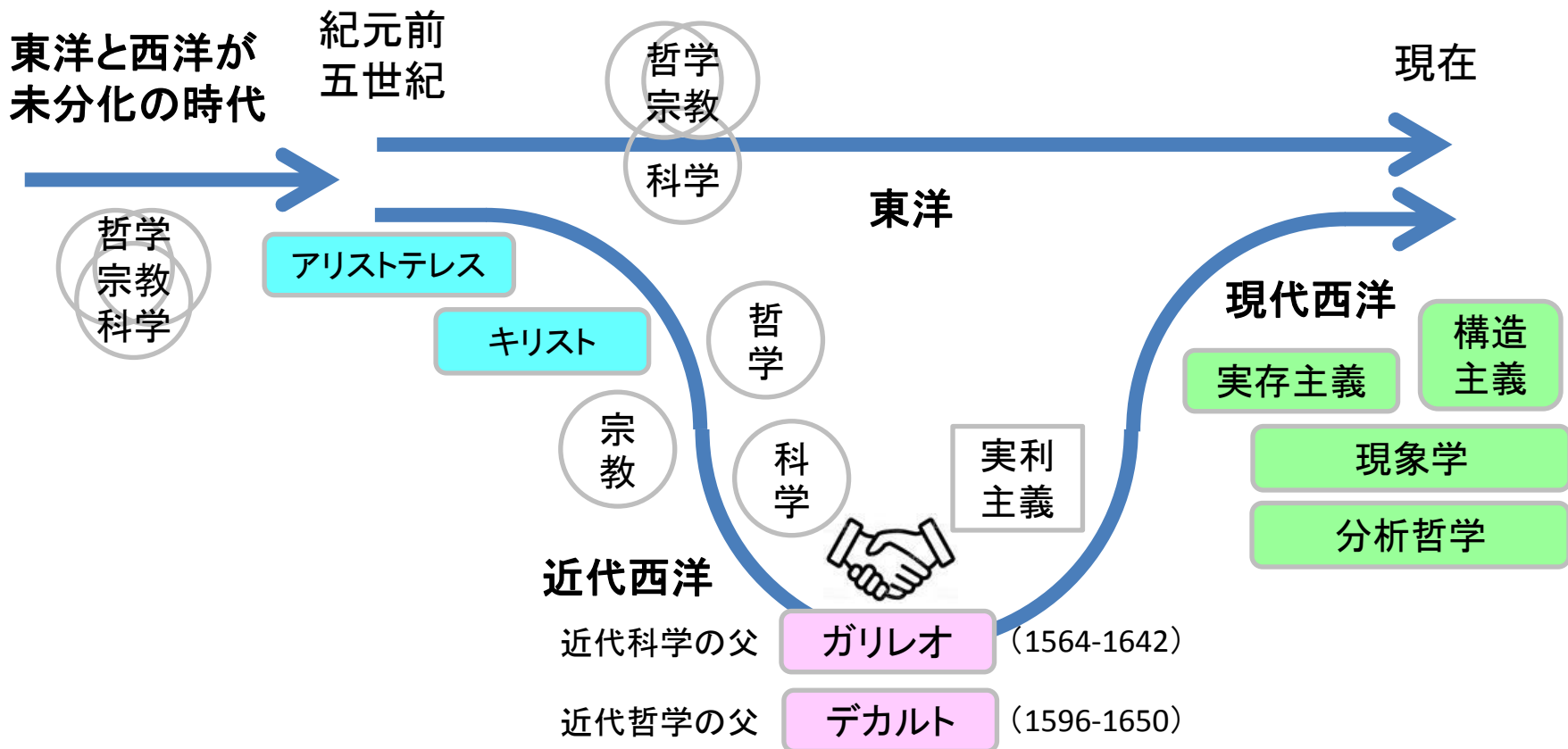
西洋哲学と東洋思想との違い

	西洋哲学	東洋思想
宗教と哲学	分ける	分けない
	「知ること」(哲学)と「信じること」(宗教)を明確に立て分けている	人間の真実を探求する哲学と宗教の本質は同じ
絶対者	「神」	「無」
人間の真実	自己の外なる絶対的な権威や社会制度、政治機構に求める	自己の内なる生命に求める
知識	科学的、分析的に追及するもの	総合的、直観的に把握するもの
	理性によって究極の真理を追究	観照(仏の智慧で事物の本質を把握すること)によって悟る
論理	「物の論理」	「心の論理」
	主体を超越的なものとして残し、理性により現実の事物の世界を分析し、手を加える	自己の心のうちを徹底して覗き込み、無にゆきつき、それが現実の実相だと知る方向に向かう

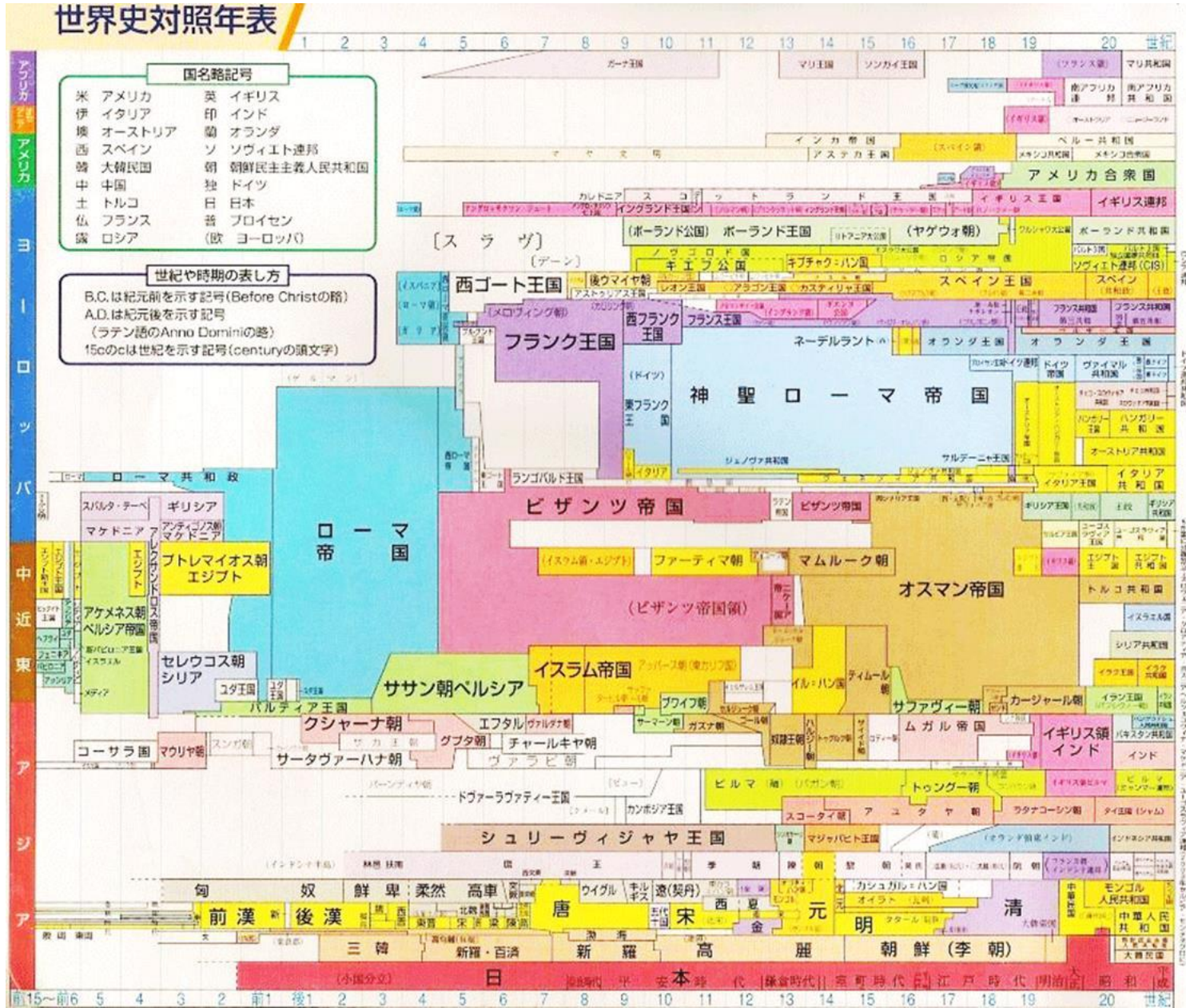
東洋と西洋の二千五百年を俯瞰する

西欧哲学の歴史

- ✓ 神の否定→理性が残る→科学が新しい神の座
- ✓ 科学と実利主義が手を組む→人間の真実を求める心が蝕まれる
- ✓ 近代科学がもたらした現実を指摘し、世界に調和を取り戻す動き



東洋と西洋の二千五百年を俯瞰する



END